初回特別号

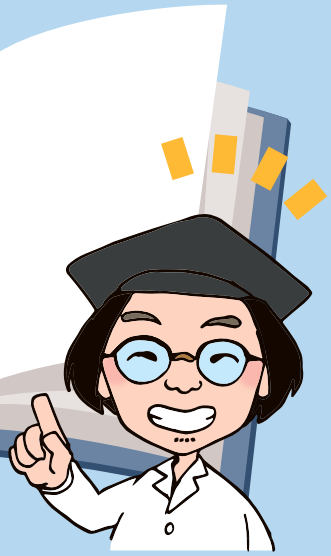
鳥羽・海藻文化革命

vol.1

岩尾博士の海藻博物記

～ワカメの話～

陰干し中のメカブ



本号より、「鳥羽の海藻」をテーマに、鳥羽市水産研究所の岩尾博士によるコラムがスタートします。身近にある海藻のさまざまないろはを楽しく紹介していきます。

水産研究所 ☎㉕3316

三重県で生産されるワカメの大部分は鳥羽で採れたものだ。天然に生えているものを海女さんが潜って、あるいは船の上から覗きメガネと長い鎌を使って刈り取る天然ワカメと、ロープに生やしたものを刈り取る養殖ワカメ。いずれも収穫時期は12月ごろから4月末くらいまで。

このワカメの生物学的特徴についても説明したいところだが、陸上の植物とはあまりにもかけ離れた生き方をしており、こってりと説明をすることでワカメのことが嫌いになってもらっても非常に困るので、またの機会に。

今回は養殖ワカメを生産するワカメ屋さんがこの時期何をしているかを少し紹介したいと思う。

桃取のワカメ屋さんがタネ付けするために遊走子が出た水槽に枠を漬けているところ

ついこの間までは収穫したワカメを乾燥させて乾燥ワカメや乾燥メカブを作ったり、湯がいて塩もみし、脱水した塩蔵ワカメを作ったりと大忙しだったが、まだ気が抜けない。5月は何といっても「タネ付け」がある。このタネはいわゆる種子ではなく、遊走子と呼ばれる胞子のようなミクロサイズの泳ぐ粒であるとだけ言わせていただこう。

ワカメの根元にできるタネを出す部分が、あのおいしいメカブである。ワカメ屋さんは、この時期になると自分が「これだ！」と思うワカメ数十本からメカブを切り取る。このメカブを日陰で1時間弱干してしっとりさせる。あらかじめきれいな海水を汲んでおいた水槽にこれらを投入すると瞬く間に海水は茶色に染まる。これがタネ、つまり遊走子である。

タネ付け完了後、整然と並ぶタネ糸の枠

タネ糸を巻き付けた塩ビパイプ製の枠を必要な数だけ漬ける。1枠にタコ糸のような糸が100m程度巻き付けてある。20分～30分漬けたら十分タネが付くので、水槽から枠を取り上げ、海水を汲んでおいた別の水槽に移し、間隔を空けて整列させる。これでタネ付けは完了する。

この時点で糸を顕微鏡で観ると、ほとんど透明の小さな小さな粒が繊維に付いているのを確認できる。

数日もすると薄い黄色に変化し、2週間ほどでひとまわりほど大きくなった（と言っても10ミクロンほど）飴色の粒になる。この色は光合成色素の色である。タネも光合成をして自分の力で生きているのだ。明るすぎても暗すぎても生長が阻害されるし、秋の養殖開始まで生長させすぎてもいけないので、この後もワカメ屋さんは気を揉むことになるのだ。